

25年ぶりの
優勝のかげに
圧倒的なチーム力。

バレーボールの魅力はチームワーク。
スパイクやサーブは個人プレーですが、
決まれば喜びが倍増します。

バレーボール部

全員が同じ気持ちで
戦っていた。

2013年5月、うれしいニュースが
飛び込んできました。バレーボール部
（男子）が東海大学男女リーグ戦春季
大会で、1988年の秋季大会以来、
25年ぶりとなる11回目の優勝に輝いた
のです。

1部に所属する8大学で争われるこ
の大会で、名城大学は長らく3位、4位
に甘んじてきました。部員総数28人と
選手層は決して厚くなく、部員たちは
体格面でも恵まれているわけではあり
ません。しかし、「今回は総合力で勝て
た」と、監督である薬学部金子美由紀
准教授が語るように、チーム全体の力
が勝利を招き寄せました。

牽引したのは、当時キャプテンだった
鶴田恵人選手（人間学部4年）。「優勝
を狙うには100%の力で戦うしかあ
りません。しかし、レギュラーとほかの部
員との温度差、先輩と後輩の間の壁が
あり、力が出し切れていなかったんで
す。そこで、一つの目標に向かうムードづ
くりから始めることにしました」

みんなの気持ちが一つになるまで、部
員に積極的に声を掛ける日々が続いま
した。そして、全員が同じ熱意で試合に
臨んだ結果、チームは優勝を勝ち取る
とともにベストサポーター賞も受賞。裏
方としてチームを支えた部員たちの健
闘もたたえられました。



「卒業後、どんなポジションでも活躍できるように、4年間で人間力をつけてほしい」と話す、金子監督(左)と江藤コーチ(右)



優勝チームを引っばってきた鶴田さん(右)。「卒業後も何らかの形でバレーボールを続けたいですね」
東海大学男女リーグ戦でセッター賞をもらった黒岩さん(左)。「新キャプテンとしてがんばります!」



モーション
もよこしま

自ら動ける人間、 チームを目指して。

実は鶴田選手は2年生の秋、病気のために入院。半年間もバレーボールから離れ、選手としての復帰は難しいと誰もが思っていました。しかし、3年生の春、まさに奇跡の復活。「コートに立てるだけでうれしい」と、チームのために自ら率先して動いてきたことも、今回の優勝と無関係ではありません。

江藤直美コーチが「いいチームづくりのために、学生の主体性を大切にしている」と語るように、バレーボール部では学生が練習メニューを計画し、実行しています。「試合中、監督やコーチは何もできない。だからこそ、自ら実行できる人間になり、チームとして主体性をもって取り組んでほしい。こうした思いが結果として現れたとも言えるのです。」

一方、技術面では監督が思い切った戦術を変更。この壁を選手が自分たちの力で乗り越え、高いレベルへスキルを向上させたことで、ついに栄冠を手にすることができました。

今後の目標はインカレに出場し、関東の強豪チームを倒すこと。新キャプテンの黒岩晃貴選手(経営学部3年)も「絆を引き継ぎ、チーム一丸となって戦いたい」と今後の抱負を語ります。バレーボールはチームプレイ。選手が変わればチームも変わります。新生チームがどう成長するか、楽しみです。